

かけだしの頃



20代の頃
船上での搬入風景の1枚

みらい建設工業株式会社 東京支店
羽田工事事務所 所長

松本 洋

1981（昭和56）年に大都工業（現みらい建設工業）株式会社に入社。以来、港湾工事等を主に研鑽を重ね、現在にいたる。



今だから話せる
ゲンバの失敗
3

今でもその工事のことを考えると、あの頃は「若かったんだな」とつくづく思っています。ちょうど年末年始の休みに入る前ですか。東京湾のある場所で護岸工事をしていて、そのときにあの失敗をしてしまったのです。

護岸工事というのは、一般的には予定している海底にシートパイルを平行に打ち込み、海面より上に出ているシートパイルの頭部をタイロッドで結び、平行に打ち込んであるシートパイルの間に中詰土砂を入れていくという工程を経ます。

当時、長い休みに入ることから、何か切りのいいところまで作業を終えるために、シートパイルをがんばって打ち込んで、頭をタイロッドでどうにか結び終えたのですが、そこで惜しくも時間切れとなり、中詰土砂を投入できないまま休みに入ってしまった。

休み明けのことです。休み中に天気が荒れたのでどうも嫌な予感がして、とにかく一番に現場に乗り込んだのですが、案の定というか、シートパイル同士を結んでいたタイロッドが海に落ちてなくなっていて、啞然としたことを覚えています。

タイロッドというのは、シートパイルの自立を保つうえで欠かせない部品です。これがないと中詰土砂を入れても、入れた土砂の土圧でシートパイルは倒れてしまいますから、結果として工事が先に進まない状態になります。

そこで落ちたタイロッドの代わりを注文しようとしたのですが、運の悪いこと

にそのタイロッドは特注品で、入ってくるまでに最短でも数週間はかかるというではありませんか。これこそが弱り目に祟り目というもので、そのときはさすがに目の前が真っ暗になりました。

もちろん、これは我々の名譽のために言っておきますが（笑）、当然こちらもまったくの無策で休みに入ったわけではありません。実はほかの工区でシートパイルが倒れたという情報を耳にしていたから、休みの間にそうならないようH鋼を補助材にしておくなど、それなりに対策は講じていたのです。ただ、あのときはさすがにタイロッドまで考えが及ばなかった（笑）。

結局、休みに入る前で、少し油断をしていたということなのでしょう。つまり、自然相手のこの仕事で、事前になにに対策を重ねても「絶対に大丈夫」ということはありえない。にもかかわらず、対策を講じたから「問題ない」と考えていたとすれば、まだまだあのときは「若かったな」としか言いようがない。

そういう意味からすれば、自然相手の土木という仕事は、トラブルが起きることは避けられない宿命とさえ言えますから、トラブルが起きることを恐れているだけではダメで、起きたトラブルの被害を最小限に止めるという発想こそが重要だと思えます。トラブルを恐れるより「被害を最小限に食い止める」という考えを实地に学べたことが、あの失敗から得られた教訓のような気がしてなりません。